



ハウス夏作における播種・定植時期および日長の違いがニラの抽だいに及ぼす影響



写真 日長調節の様子

注) 遮光シート(遮光率100%、0.08mm厚)を18:45～5:45に展張し、日中を13時間に調節。
期間は2021年5月1日から9月2日。

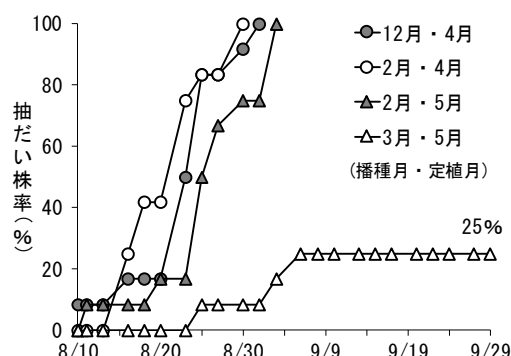


図1 抽だい株率(%)の推移

注) 抽だい株率=抽だい株数/12株×100

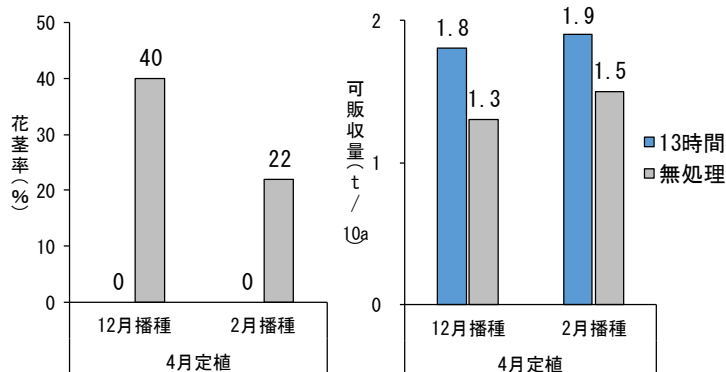


図2 10月収穫時の花茎率(%)と可販収量(t/10a)

注) 花茎率=花茎本数/分けつ数×100

農業技術センターでは、ニラの施設栽培で電照を導入すると、12～2月に増収することを明らかにしています。一方、3月以降に抽だいが発生し、減収することが課題となっています。そこで、抽だいを回避するため、ニラの開花特性の解明を目指して試験に取り組んでいます。

ここでは、ハウス夏作における播種・定植時期と定植後の日長時間の違いが、‘ミラクルグリーンベルト’の抽だいの発生に与える影響についてご紹介します。

播種・定植時期の違いでは、12月と2月に播種した苗を4月、2月と3月に播種した苗を5月に定植した場合、いずれの区も8～9月に抽だいが発生しました。抽だい株率は、3月播種・5月定植で25%と最も低くなりました(図1)が、5月定植は、両播種月とも1回目の収穫時に分けつ数が少なく、4

月定植よりも収量が少ない傾向でした(データ省略)。

定植後の日長の違いでは、日長を13時間に調節した場合(写真)、いずれの播種・定植日も抽だいは発生しませんでした。また、4月定植では抽だいが抑えられたことで、10月の収量が多くなる傾向が認められました(図2)。

今後は、ハウス内外の気象などと抽だいの関係について、さらに詳しく分析する予定です。

本研究は、内閣府地方大学・地域産業創生交付金「IoP(Internet of Plants)」が導く「Next 次世代型施設園芸農業」への進化の助成を受けたものです。

(先端生産システム担当 和田絵理子

088-863-4918)